

バウハウス叢書のアーカイブ化および公開によせて

日本大学芸術学部准教授 須藤温子

1. バウハウスについて

バウハウスと初代校長グロピウス

バウハウスはザクセン大公立美術大学とザクセン大公立工芸学校を合併し、建築部門を付加した新たな教育機関として1919年ヴァイマルに誕生した。創設者ヴァルター・グロピウスによって発せられた「バウハウス宣言」にあるように、バウハウスの理念は絵画・彫刻・工芸といった諸造形領域を建築のもとに再統一すること、それらの共通基盤に実習中心の工房をおくことであった。

バウハウスでの教育は、半年間の予備教育（Vorlehre）、3年間の工房における形態教育（Formlehre）を伴う工作教育（Werklehre）をへて、最終段階で建築教育（Baulehre）へと進むというものだった。もっとも建築教育はグロピウスが学長をつとめた1919年から28年には行われず、基礎デザインを学ぶ予備教育とインダストリアル・デザインを学ぶ工作教育で終わっている。1925年以降、工作の手段に機械を導入したことでデザイン教育に画期的な展開をもたらしたが、教育の基本理念はあくまで建築教育にあった。

従来の芸術アカデミーでの教育は、画家や彫刻家を中心とした天才志向の教育であり、もっぱら線描と彩色の技の養成であって、生活、技術、生産経済といった現実と結びつかず、人間の生から乖離した「サロン芸術」、あるいは「芸術のための芸術」を生み出していた。絵画や彫刻と異なり、建築は人間の生活と結びつき、また多くの人びととの共同作業によってなりたつ造形活動である。アカデミー教育にたいする批判にもとづき、グロピウスは実生活を舞台に、孤立した諸芸術を建築のもとに実践的に統合しようとしたのである。諸芸術の統合という構想は、グロピウスの起こした設計図からバウハウスの工房が全施工を担当した結果、 Dessau のバウハウス校舎として実現する。1926年のことである。

バウハウスと新しい芸術運動

1920年代は、オランダのデ・ステイル、フランスのピュリスム、ロシアの構成主義など、ドイツ周辺のヨーロッパにおいて新しい芸術運動が台頭した時代であった。バウハウスと新興の芸術運動に共通するのは、絵画・彫刻・工芸・建築といった従来の枠組みを超えた広い視野、科学技術にたいする関心、装飾を排した幾何学的な美的原理であり、それらが新たな造形活動の原動力となっている。

バウハウスはこれらの新興の芸術運動と密接に関連しながら表現主義的傾向から構成主義的傾向へ転換をはかっていった。この転換の動きは、国外から押しよせる新たな芸術運動の潮流に敏感なグロピウスと、授業を担当していた表現主義者のヨハネス・イッテンとの確執として現れた。テオ・ファン・ドゥースブルフを代表とするデ・ステイルとバウハウスの接触により、両者の決裂は決定的なものになる。

バウハウスの教師のなかで、ドゥースブルフと親しかったのはアドルフ・マイヤーであ

った。マイヤーはグロピウスと建築事務所の見習い時代からの付き合いで、二人は1919年以降もバウハウスの近くに共同で建築事務所を維持していた。「グロピウス建築」といわれる建築のほとんどはマイヤーが手がけたものである。当時、ドゥースブルフは幾何学的造形をめざしていたが、グロピウスやマイヤーの建築にも設計のベースに幾何学的格子が用いられた。

ところで、20世紀初頭ドイツの建築家の模範となったアメリカのフランク・ロイド・ライトが日本建築に関心をよせ、シンプルさと幾何学的な抽象の原理を浮世絵に見出し、設計にとりいれたことは知られている。それについてのべたライトの『施工された建築と図面集』（ベルリン、ヴァスマート出版刊、1910）は、アドルフ・ロース、ブルーノ・タウトをはじめ、バウハウス関係者ではグロピウス、アドルフ・マイヤー、ミース・ファン・デル・ローエらによっても熱狂的に受け入れられた。彼らはライトを通して日本建築の要素を受容したといえる。

また、バウハウスにおいて日本芸術の受容が建築分野だけではなく現在では明らかになっている。1919年に着任したヨハネス・イッテンを通じて、水墨画とその原理が知られていたし、翌年に着任したパウル・クレーはすでに1900年に屏風『アーレ河畔の風景』を浮世絵に依拠して描いていた。イッテンの後任であったラースロー・モホリ＝ナギも日本の版画の構図法からヒントを得、極端な俯瞰やフレーム・カットといった技法を用いて写真を撮影したのである。

1918年から1922年頃がバウハウス設立期と表現主義から構成主義への転換期とすれば、転換後のバウハウスは一気に変貌を遂げる。外部の芸術運動が次々とバウハウスに入りこみ、1922年にはロシアからカンディンスキーが、1923年にはモホリ＝ナギが招聘された。モホリ＝ナギはドイツにおいて展開されている構成主義運動の担い手であった。彼がイッテンの後任として予備課程の授業を担当したことから、バウハウス全体の方針が表現主義から構成主義へと方向転換したという印象を与えることになった。以後、1930年代へ向けてバウハウスが構成主義の線に沿ってモダン・デザインを形成させていったことは事実であるが、バウハウス自体はひとつの芸術運動体というよりも教育機関であり、そこで最も意識されたのが純粋な芸術よりも生活と機能であったことに変わりはない。

2. バウハウス叢書について

バウハウス叢書は全14巻からなる。1925年にバウハウスがヴァイマールからデッサウへ移転後、最初の8冊が刊行された。1932年、ナチスからの圧力によりバウハウス・デッサウ校は閉鎖、ベルリンに私立研究所として発足するものの、その翌年には閉鎖を余儀なくされた。そのため、バウハウス叢書は結果的に1925年から1930年の間に14冊しか刊行されなかったのである。

刊行からすでに90年近くが経過した現在もなお、叢書はバウハウスでの芸術教育だけではなく1920年代から1930年代にかけての建築、デザイン、芸術運動を今に伝える第一級のドキュメントである。

グロピウスとともにバウハウス叢書を編集したのはモホリ＝ナギであった。彼は叢書を黄色のクロス装で統一し、第3、9、13巻以外の叢書のデザインを手がけた。著者としてもシュレンマーとの共著『バウハウスの舞台』（第4巻）をはじめ、静止画（絵画・写真）か

ら動画（映画）へのメディアの変遷をまとめた『絵画・写真・映画』（第 8 巻）、デザインの基礎教育の古典となった『材料から建築へ』（第 14 巻）を執筆している。

日本語版叢書は、規格寸法から造本、装丁、紙の質、本文のレイアウトにいたるまで初版本を忠実に再現している。全 14 巻に論考集の別巻 2 巻が添えられ、1991 年から 1999 年にかけて中央公論美術出版社から出版された。

3. バウハウスと日本大学芸術学部

日本大学教授として芸術学部デザイン学科の基礎を築いた山脇巖は、道子夫人とともに 1930 年から 32 年までバウハウスに留学した。山脇巖は建築やフォトモンタージュなどを修得し、多くの資料を持ち帰った。帰国後、モホリ＝ナギの構成原理にならってフォトコラージュ作品「バウハウスの一撃」（1932）を発表している。

叢書の一部をデジタル・アーカイブ化、公開へ

バウハウス叢書は日本大学芸術学部が所蔵する貴重資料のひとつである。ヨーロッパ（ドイツ）の出版物の著作権は作者の死後 70 年間保護されることから、叢書の版權をもつランゲン・ミュラー社のライセンス部門（国外担当）（ドイツ、ミュンヘン）にアーカイブ化と公開の許諾について問い合わせた。

当初、デザイン性の高い叢書 14 冊の表紙をアーカイブ化し、芸術学部の HP 上で一般公開する計画であったが、実現には表紙 1 枚につき 100 ユーロ（2012 年時点）、2 年毎の契約更新が必要であった。

叢書の一部には著作権が失効しているものがあり、これらについては表紙だけではなく本文のデジタル・アーカイブ化および一般公開が可能であるとの回答をランゲン・ミュラー社から得たため、予定を変更し、以下の叢書 4 点を公開するに至った（2013 年時点）。

第 2 巻『教育スケッチブック』（パウル・クレー）

Paul Klee (1879-1940): Pädagogisches Skizzenbuch, Bauhausbücher 2, München (Albert Langen) 1925, S. 50.

バウハウスにおける 1921 年、22 年度の形態論の講義のエッセンス。クレー研究の必読文献。

第 3 巻『バウハウスの実験住宅』（アドルフ・マイヤー）

Adolf Meyer (1881-1929): Ein Versuchshaus des Bauhauses in Weimar, Bauhausbücher 3, München (Albert Langen) 1925, S. 78.

あらかじめ製作済みの建築部材からなる「規格化住宅」の建築は、グロピウス、ひいてはバウハウスにとって課題のひとつであった。グロピウスと共同設計者であったマイヤーの著作。

第 6 巻『新しい造形芸術の基礎概念』（テオ・ファン・ドゥースブルフ）

Theo van Doesburg (1883-1931): Grundbegriffe der Neuen Gestaltenden Kunst,

Bauhausbücher 6, München (Albert Langen) 1925, S. 40.

オランダの芸術運動「デ・ステイル」の中心人物ドゥースブルフの芸術論。抽象絵画の見方を説きあかしている。

第 11 巻『無対象の世界』（カジミール・マレーヴィチ）

Kasimir Malewitsch (1879-1935): Die Gegenstandslose Welt, Bauhausbücher 11, München (Albert Langen) 1927, S. 104.

ロシア・アヴァンギャルド作家のひとり、マレーヴィチの著作。シュプレマティズムとよばれた彼の造形志向は本書によってはじめて西欧に伝えられ、抽象絵画の動向に大きな影響を及ぼした。

参考文献

利光功・宮島久雄・貞包博幸（編）『バウハウスとその周辺 I 美術・デザイン・政治・教育（バウハウス叢書 別巻 1）』、中央公論美術出版、1996 年

利光功・宮島久雄・貞包博幸（編）『バウハウスとその周辺 II 理念・音楽・映画・資料・年表（バウハウス叢書 別巻 2）』、中央公論美術出版、1999 年

クラウディア・デランク『ドイツにおける〈日本＝像〉 ユーゲントシュティールからバウハウスまで』（水藤龍彦・池田祐子訳）、思文閣出版、2004 年